

「となる用法」(『国文学研究』第三号)。句意の一層平明な例文がその後幾つか集まった。それらを用いていけば、説明は少し通りやすくなったはずである。もともと全文が不備未完の形、部分的な書き換えでは済ませない。しかし気付いた点はあれで一応言い述べた積りであり、その内容も格別進展していない。旧文はそのまま置いて、頻度表(同誌一四七上欄)の数字だけ改める。

	甲「になる」	乙「となる」	甲十乙
A (元禄)	五二二 (八五%)	九四 (二五%)	六一五
B (寛政)	一七二 (四九%)	一八二 (五一%)	三五四

なお参照排書数は元禄八十八部、寛政七十部とする。

「しかけるの用法」(同第五号)。例題A I 3 a 初句の類例――

おもしろい無理いひかける花の関(付句)

の解を次のように改める。(同誌一四〇下欄参照)「無理言いかける」は主語を花の持ち主と取り、来観者に向って何か注文をつけたのだ(例エバ発句か和歌を作れナド)と読むことにする。前解は恥しい粗読、あれでは「花の関」が何としても収まらない。参考…

藪のなき人へ通さし花の関――等盛(陸奥千鳥一・Ⅴ春句五〇)

原句の主客が入れ替っても、「言いかける」の動意の表現という性格は余り変らないものと考え、この点はしばらく保留する。